



2004年 4月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

2004年4月
第43号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

連載「点字から識字までの距離」（40）（山内 薫）	1
酔夢亭読書日記（安田 章）	3
漢点字による漢字仮名交じり文中の カタカナの表記（岡田 健嗣）	5
横浜漢点字羽化の会規約	11
漢文のページ	13
ご報告とご案内	15
平野久美子と短歌鑑賞	18



点字から識字までの距離（四〇）

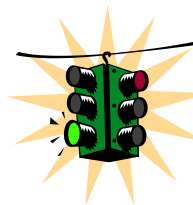
山内 薫（墨田区立緑図書館）

日本語の変化

「日本語は中国語の植民地言語である。」という超刺激的な（小松英雄の表現）指摘で展開される、書家、石川九楊の『二重言語国家・日本』（日本放送出版協会、一九九九）を読んだ。石川九楊は、『「書く」ということ』（文藝春秋 二〇〇二）などで、文字は肉筆以外ではあり得ず、書字を妨げるワープロやパソコンは、事務用あるいはせいぜい浄書用に限定して用い、文字を書くこと（書字）を盛んにして、日常不断の思考を計ることを提唱している。そうした考えを敷衍して、文学賞は「本人自筆」に限れ、などという過激な論を展開している。確かに、幼い頃から文字を手で書くという運動がワープロやパソコンの出現によって極端に少なくなれば、ことばが身に付かなくなるという事態が到来するかも知れない。以前紹介した「純粹失読」といわれる高次脳機能障害の人の中に、読めないけれども書くことはできる人がいることが報告されていたように、書字運動が日本語の体験

の中で大きな要素となっているのではなからうか。

この本と並行して読んだ『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』（笠間書院 二〇〇一）という本の中で著者の小松英雄が『二重言語国家・日本』の内容を要領よく四点にまとめている。



（六六頁）

「（一）中国文化との継続的接触によって導入された大量の漢語を日本語として組み入れなかったなら、日本文化は、たいへん貧しいままにとどまっていたであろうこと、また、そういう貧しい文化しかもたない社会における伝達の媒体として機能しつづけていたなら、後世、西洋文明の受け皿になりえなかったこと。」

「（二）漢字は造語力に富んでおり、必要な語彙をいくらかでも作り出せたので、日本語は、どれほど高度な内容でも自由に表現できる言語でありつづけることができたこと。」

「（三）前項の副作用として、口頭言語の円滑な運用が阻害されるほど、漢字に対する依存性が抜きがたくなつてしまっていること。」

「（四）現在、漢語語彙の大きな部分を、文字への依存性のないカタカナ語と入れ替えることによって、円

滑な情報伝達が可能な言語への抜本的な体質改善が進行しつつあること。その意味で、現在の日本語は、大きな転換期にあること。」

小松英雄は特にこの(四)について言及する。「日本語が刻々と変化するのは、日本語が日本社会における情報伝達の媒体として効率的に機能し続けることができるように、社会環境の変化に連動して体系を更新しつづけるからである。」(同書、二五頁)

例えば漢字といえばすぐに同音異義語の問題が取りあげられるが、小松はこの本の中で自身の経験から「ソータイテキに把握する」ということを講義の中で言うときに、その言葉を口にしながら黒板に「総体的」と書く習慣が身に付いていたという。学生は「相対的」と聞き取るからである。しかし一方で「総体的」よりも多く使ったはずの「相対的」を黒板に書いた記憶がない。黒板に書くという手間をかけるくらいなら最初から「トータル」として「と言えよ、むしろ「総体的」と書かれても全員がその意味を理解するとは限らない、という。「すなわち、同音異義の紛らわしい漢語があれば、優勢な方が漢語で残り、劣勢なほうは、対応する適切なカタカナ語があれば、それに置き換えられるということである。」(七〇頁)



別の著書で小松はまた、「見れる、食べれる」など悪評の高い「ら抜きことば」について言及している。『日本語はなぜ変化するか 母語としての日本語の歴史』笠間書院 一九九九)

「尊敬表現のつもりで、(先生は、あした大学に来られますか)と言うと、先生のほうは、それを可能表現と理解して腹を立てかねない。(いらっしやいますか/おいでになりますか)なら誤解を生じないが、そういう表現は急速に影をひそめつつある。」(二二二頁)助動詞のレルが尊敬表現と可能表現を兼ねているために誤解が生じる可能性があるわけで、(来られますか/来れますか)と使い分けるシステムにすればそういう誤解を生じることがない。小松はこの本で歴史にさかのぼって日本語の変化を検証し、日本語の効率的な運用にとって「ら抜きことば」が積極的な意義を持つことを客観的に証明している。

「いつの時期のどの言語にも多くの不安定要因が潜在しており、言語体系は微妙なバランスの上に乗っている。さまざまの条件が変化して、それまで潜在していたデメリットが部分調整できる限界を超えたり、複数の不安定要因が結合したりするとバランスが崩れ、新しいバランスを求めて言語変化が始動する。」(二二九頁)また「どれほど合理的な変化であって

も、新しい言いかたは、当分の間、低く位置づけられ、それを使う人も低く評価されることを知っておくことは、社会生活における円滑な伝達にとつて大切なことである。」(二四一頁)と述べている。

この本では『枕草子』や『源氏物語』における助詞の用例などを豊富に引用しながら、助動詞の変化を考察しているので、興味のある方は是非原本に当たっていただきたい。



孫子その三

「迂(う)を以て直と為し、患(うれ)いを以て利と為す」(軍争篇)

所謂、「迂直の計」、「患利の計」といわれる高等戦術である。

回り道をしているようで、それは実はまっすぐの一番の近道である、などというのは何だか目眩まし、幻術みたいである。世俗にも「こつこつと地道に努力するのだよ、成功するには回り道のように見えてそれが一番の近道なんだよ」といわれることが多いが、孫子と関係あるかどうか、私には分からない。

「迂を以て直と為し」というフレーズから「損して得取れ」、「急がば回れ」などという言葉をついつい連想してしまうが、さて、「損して得取れ」などということは現代日本にもまだ残っているのだろうか。損するのは絶対イヤだが、得するためには人を押しのけ、なりふり構わない、なんて格好悪いことはしたくないなあ。

目先利益の優先ばかり考えて、買い物をしてもしシートも出さない商売人がタマににいるが、そのような商店は案の定閑古鳥が鳴いている。これなどは「小さな得をしようとして、大きな損をしている」状態と言えるだろう。

金銭の出費を「損」と捉え、収入を「得」として、「得」のことばかり考えてするような社会活動、事業などは何か底が浅い感じがしてならない。金銭的結果がすぐ現われないようなことは誰もがやらない、なんて事態になったら文化国家とはとても言えた義

がすぐ現われないようなことは誰もがやらない、なんて事態になったら文化国家とはとても言えた義理ではないと思う。少なくともイキで無いのは確かだ。

「迂直の計」という高等戦術を実践するには、恐らく、思考の枠組み（パラダイム）転換が必要なのである。例えば、考現学で著名な今和次郎は、戦後混乱期の人びとの具体的生活に着目し、「生活学」を提唱したが、「生活」というものを考える最初の一步を「娯楽とは何か」という問いから始めたという。今が提唱するまでは「生活」というものは労働力再生産の視点からしかアプローチされなかつたわけである。私などは何もしないで、公園でぼかんとしていたり、行く雲を飽きずに眺めていたりすることに大いなる慰安を得るものであるが、このような無意味に見える行為は労働力再生産という視点からでは理解されにくい。しかし、今はそうしたものも精神的充実という視点から意味あるものとして光を当てたのである（以上、天野正子著「生活者とはだれか」中公新書）。視点を変える、逆に考えてみる、ということも時には必要かもしれない。

「患利の計」の方が分かりやすいのかもしれない。つまり、「患（うれ）いを以て利と為す」わけであるが、

似たようなものに「わざわいを変じて福となす」「禍福はあざなえる縄の如し」「人間万事塞翁が馬」などがある。「煩惱即菩提」になると離れすぎか。不利な条件を有利なものへ転じる。そんなこと不可能である、と考えるよりも何とか逆転しようと思えばポジティブに立てている方が精神衛生的には良いと思う。

「故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て変を為す者なり。故に其の疾（はや）きこと風の如く、其の徐（しず）かなること林の如く、知り難きこと陰の如く、動かざること山の如く、動くこと雷（いかずち）の震うが如くにして、郷を掠むるには衆を分かち、地を廓（ひろ）むるには利を分かち、権に懸けて而して動く。迂直の計を先知する者は勝つ。此れ軍争の法なり。」（軍争篇）

ご存知、武田信玄の軍旗、風林火山の部分である。実際には孫子の兵法は武田の甲州軍団では活用されなかつたそうである。

「将に五危有り。」（九変篇）とし、将たるものには、五つの危険がつきまとうと孫先生は言われる。

「必死は殺され、必生（ひつせい）は虜にされ、忿速（ふんそく）は侮られ、潔廉（けつれん）は辱められ、

愛民(あいみん)は煩わされる。」

決死の覚悟で行けば、殺され、生きたい、生き延びたいという思いの強いものは捕虜にされ、怒りつばいものは敵の挑発に乗りやすいし、人格高潔なものは侮辱に弱く、人情あるものは部下に振り回される。「厚くするも使うこと能わず、愛するも令すること能わず、乱るるも治むること能わざる」ことになってしまい、部下が言うことを聞かない様はどら息子の如くで、ものものやくには立たない状態に陥ってしまう。

この五つの危険は、将でなくても普通に生きる私たちにも戒めになる言葉だと思ふ。

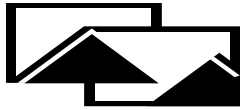
孫子 完

今回引用、参考にした文献は以下のとおり。

「孫子」浅野裕一 講談社学術文庫

「孫子」町田三郎 中公文庫

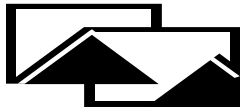
「生活者」とはだれか 天野正子 中公新書



漢点字による漢字 仮名交じり文中の カタカナの表記

横浜漢点字羽化の会

代表 岡田 健嗣



去る本年二月十五日(日)、本会の木下と、漢点字使用者二名とガイドの方お二方と私で、大阪府吹田市の、故・川上泰一先生宅をお訪ねしました。

先方では、日本漢点字協会の会長をお務めになる川上先生の奥様と、少し遅れて、協会の理事で、京都ライトハウス点字図書館長の加藤俊和様と、協会の漢点字訳を行って下さっておられるボランティアの方に、お出迎えいただきました。

そこで話題となったのは、現在協会でも議論されている、漢点字訳に当たつての、文章記号の処理、とりわけ現在は、カタカナの表記にその議論が集まっています、多方面の意見を求めているということでした。

本会でもかねてより、EIBRKWという漢点字訳のプログラムを開発して、漢点字の文書を作成・配布して来ましたので、そのコンセプトは、充分明らかにして来た積もりでございました。

しかし、議論が継続している今日、再度ここに、改めてそれを表明しなければいけないものと考えます。以下に記す通りです。

一・前提

(一) 日本語点字とカタカナの表記

従来の点字には漢字はおろか、ひらがな・カタカナ

の区別さえありません。そのために、カタカナの表記には、何の注意も払われずに来ました。漢点字を習得しておらず、漢字という文字の知識をもたない視覚障害者の中には、一般に、ひらがなで表記するのか、カタカナで表記するのか、はたまた漢字で書くのか、判断できない人が少なくありません。多くの場合、外来語はカタカナで書くのだから、日本語とは違う音は、カタカナで書くのだからと理解しているのではないかと推察します。

漢点字の学習を希望される成人の視覚障害者の方に、「バス、タクシー、トラック」はカタカナで書きません。「電車、自動車、自転車」は漢字で書きます。漢字で書くものは、ひらがなで書いても構いません。ただし、漢語は漢字で、和語は送りがないつけた漢字かひらがなで書くのが普通です、というお話をしますが、従来の点字による知識では、このような説明も、決して容易に理解できるとは限りません。このように点字の世界にカタカナの概念を導入することには、予想を超えた困難が存在します。

川上先生も、大変ご苦労を重ねておられたご様子で、幾つかの方法を考えておられました。

何れにせよ括弧と同様に、ひらがなと同じ点字符号を、開きと閉じの記号で括って示すものです。たと

えば、(ㇿ)、(ㇿ)、(ㇿ)、(ㇿ)などをお試しでした。

(二)漢字仮名交じり文中のカタカナの位置と表記

漢点字による「漢字仮名交じり文」の中のカタカナを考えるには、一般の「漢字仮名交じり文」のカタカナの扱いを考えることから始めなければなりません。

一般に「漢字仮名交じり文」は、(漢字)と(ひらがな)が交互に現れる形を採ります。(漢字)は概念を表す、あるいは主体的に働く(語)を表します。(ひらがな)は、概念と概念を結ぶように、あるいはその(語)を受けて、客体的に働きます。(ひらがな)は、文中ではその文の意味するところを指示しますの、大変大きな働きをしますが、文を離れて、単独には、働くことができませぬ。その意味では、極めて機能的に関与する(文字)です。

このような言葉の機能を、時枝誠記先生のご概念と用語をお借りして、(漢字)で表される語を(詞)、ひらがなで表される語を(辞)と呼ぶことにします。

さて、このような日本語の文中で、(カタカナ)はどういう位置を占めているのでしょうか？

多くの場合(カタカナ)は、(ひらがな)とは一線を画した機能を果たして、(漢字)の位置に、代わって用いられます。とりわけ外来語の体言では、「サービ

ス、ケア、ヘルパー」などと、〈漢語〉の〈漢字〉に代つて用いられています。用言でも、「サービスする、ケアする、テレする」と、〈カタカナ〉に「する」を付けることで、〈漢字〉の代わりに用いられています。この〈カタカナ〉の表記は、西洋からの外来語を受け入れるために用いられるようになったものです。

(二) 熟語

〈漢字〉には〈熟語〉と呼ばれる語群があります。

元来〈漢字〉は、一文字で一つの概念を表すもので、〈文字〉としての性格ばかりでなく、〈語〉としての性格を兼ね備えたものです。

古代の中国では、この一文字を一つの語として用いていましたが、時代が下るに従つて、言葉の表現の巾を広げなければならなくなりました。そこで、二つの文字を合わせて一つの単語として用いるようになりました。これを『聯綿』と呼びます。その意味では、この二文字で構成される語を〈熟語〉と呼んでも、英語で言う idiom (慣用句) とは異なつたものです。むしろ〈単語〉であつて、〈複合語〉と規定するのが正しいのではないかと考えます。

我が国でも、多くの二字の〈漢語〉の〈熟語〉が作られました。それが中国からやって来たものか、我が国で作られたものか、今となつては、判然としない状態

です。その中には、「道路、河川、山岳、家屋、海洋」など、同じ概念の文字を重ねるものも多く見られて、日本語では、一文字で表すより、二文字で表す方が、落ち着きがよいのかもしれない。

〈カタカナ〉の用いられ方は、〈漢字〉と同様ではないかもしれませんが。しかし、その多くは外来語です。で、二つ、三つの単語が並ぶことも考えられます。そのようなときは、日本語の表記の慣習で、外国語の表記ではスペースが入るところに、「・」(中点)を入れています。日本語の表記には、欧米の文中にあるようなスペースは馴染まないと考えられているからかもしれません。

もう一つ、〈漢字〉の熟語には、「四文字熟語」というのがあります。「閑話休題、七転八倒、弱肉強食」等々ですが、このようなものは英語の idiom とはその用いられ方・性格を異にするとは言え、〈複合語〉ではなく、〈慣用句〉と考えてよいものでしょう。

二. 漢点字による漢字仮名交じり文中のカタカナの表記

本会では H・R・X・M という漢点字変換・編集・印刷プログラムを、独自に開発して参りました。そのコンセプトのあらまは、本誌四十一号(二〇〇三

年一二月発行)に詳しく記しました。しかし、その各論(ここでは〈カタカナ〉の表記ですが)、には、充分触れることができませんでした。以下に、その考え方と実際について、述べることにします。

(一) 単語としての扱ひ

現代の日本語文である「漢字仮名交じり文」では、先に述べましたように、〈カタカナ〉は、〈詞〉としての主体的な〈語〉という単位で登場します。つまり、その文中に占める位置は、〈漢字〉と同様であつて、〈ひらがな〉とは入れ替えはできないということですが。すなわち、文の構造上「漢字仮名交じり」を「カタカナひらがな交じり」にすることはできても、「漢字カタカナ交じり」にはできないということです。(誤解を避けるために付言すれば、これはひらがなの性格と機能の面から言えることで、一つの約束事の上に立てば、ひらがなとカタカナが入れ替わつて、漢字とカタカナで構成される文書も不可ではありません。)


(二) 触読のメカニズムとカタカナ

本誌に連載しております、拙稿『点字の読みづらさと漢点字の触読について』で、〈触読のメカニズム〉を考えてみました。

〈点字〉は、触覚に訴える文字ですので、〈文字〉としての機能を備えていて、しかも〈触読〉に耐え得る

体系であることが求められます。

その〈触読文字〉である〈点字〉は六つの点の構成です。その組み合わせは、フリーを含めて六十四通りになります。それを触知するには、整理し分類して、できるだけ小さな単位に分けなければなりません。そうして、指で触れて、その点字符号が即時に何を指示するか、判断を伴わずに読み取れるものになければならないのです。(以上、前記拙稿をご笑覧下さい。)

〈カタカナ〉の表記も、この原則を生かさなければなりません。本会では川上先生の試みから、最も〈触読〉にふさわしいと思われるものをと考えて、を採用することにしました。

(三) 文章記号と句切り符号

文章には多くの記号が含まれています。〈句読符号〉(、。?!)、〈引用符号と括弧〉(『』) (

◇ “ ”等)、その他にも「・」く * ※「や、数字記号の「|| + -」などは、文字と等価に常時用いられます。これらの多くは〈句切り符号〉と呼ばれて、文脈の要素を、一つのまとまりと認識できるように配置されています。

また、〈句切り符号〉ではない、文字の間に埋め込まれて、〈語〉の要素として用いられる符号もありま

す。通常は「・」がそれに当たると考えられますが、数字の間の「・」もそのように働くものと考えられます。

三. カタカナの表記とその実際

(一) 句切り符号、および、漢字との関係

「漢字仮名交じり文」の中の〈カタカナ〉は、これまで述べて来ましたように、〈漢字〉の占める、すなわち多くは〈詞〉に当たる位置に、〈漢字〉に変わって用いられません。この〈詞〉としての単語は、文の主體的な要素として機能するもので、〈カタカナ〉は、単に文字の並んでいるものでなく、一つの意味・概念を表すものとしてそこにあるのです。

〈漢点字文〉の中で、〈カタカナ〉をそのように表記するには、どうすればよいのでしょうか？

本会では、〈カタカナ〉を表す符号として、〈ひらがな〉と同じ点字符号を、 $\langle \text{三三} \rangle$ 、 $\langle \text{三三} \rangle$ で括って表すことにしています。これは、〈ひらがな〉との区別だけを目的とするものではありません。句読点等の〈句切り符号〉の前では、必ずカタカナ符号を閉じますし、カタカナとカタカナの間に〈句切り符号〉がある場合も、カタカナ符号を閉じ・開けします。〈漢字〉との間も同様に、その後で、閉じ・開けします。

本会の〈カタカナ〉の表記は、このように、〈カタカ

ナ〉を、意味のある〈語〉として捕らえるところから始まりました。その意味で、もう一つ付言しなければならぬことがあります。

(二) その他の符号との関係

句読点等の〈句切り符号〉は、ある意味で大変分かり易い記号です。

しかし、とりわけ注意の必要な記号に、「・」(中点)があります。この記号は大変特異な性格を持つものです。

例を挙げますと、「マガジン・オブ・メデイシン」のようなものでは、単にスペースを埋めるために使われているように見えますが、「イギリス・フランス・ドイツ・ロシア」となりますと、明らかに〈句切り〉を意識した使い方と言えます。

墨字では〈ひらがな〉と〈カタカナ〉は、はっきりと字体が異なっていますので、このような「・」も、ほとんど意識に上らせることなく過ごせるものですが、〈触読文字〉である〈漢点字文〉では、指に触れて直ぐに文字・記号の示すところを読みとって、その文脈を読み取るよう、理解に努めなければなりません。その意味で、ひらがなとカタカナとの区別、句切り符号とそうでない記号との区別ができる体系を模索しているのが現状です。

(三) 漢文と訓点

ここまでは、現代の日本語文の表記を考えて来ましたが、歴史的には『記・紀・万葉』以来の、古典の表記に踏み込んだ議論が必要と思われませんが、浅学な私にとつては、そろそろ荷の重さを感じて参りました。

しかし、〈カタカナ〉の表記を考えるに当たつて忘れてならないのが、〈漢文〉です。

〈漢文〉は、元来中国語の、古典の文章です。そのオリジナルは〈漢字〉だけで表記されています。これを〈白文〉と呼びます。

我が国では、伝わつて来たこの〈漢文〉を、日本語として読んだのです。これが〈漢文訓読〉です。この〈漢文訓読〉を、日本語の読みに従つて書き換えたものが、〈読み下し文〉です。

この〈漢文訓読〉は、〈訓点〉と呼ばれるカタカナと返り点という符号が、左右に付されています。このカタカナは、現代文の送り仮名や助詞に当たるものです。返り点は、中国語と日本語の、語順の相違の調整に用いられたものです。

〈読み下し文〉は、〈漢文訓読〉の返り点を除いて、語を日本語の順序に並べ替えて、訓点のカタカナを漢字の後ろに付けた形です。形の上では、現代の「漢字仮名交じり文」のひらがなを、カタカナに置き換えたものと考えても、間違いではありません。時間の順

序から言えば、〈読み下し文〉の送り仮名のカタカナが、現代文の、ひらがなの送り仮名に変化したものと云つてよいと思われます。

訓点の表記については他に譲つて、ここでは触れませんが、また、このような「漢字カタカナ交じり文」の〈カタカナ〉の表記についても、本会では、現代日本語の表記法に準じること、充分にその要件は満たされると考えました。

その理由は、〈読み下し文〉は既に日本語の文章として息付いていて、その中に、ルビや注記として、〈ひらがな〉が交じり込んで来ます。その意味で、〈辞〉として用いられる〈カタカナ〉も、現代文の〈カタカナ〉と同様に扱われることに異議はないものと考えられます。

以上、〈漢点字文〉の中で、〈カタカナ〉を、如何に表記するかを、考えて来ましたが、日本語の文章は、あらゆる文字に開かれていて、また、古代からの韻律が、脈々と続いているという、世界にも例を見ない言語と言われています。その表記ですので、多様な考えがあるものと思ひます。

本拙文も、その一つに加えていただいて、活発な議論が展開されることを期待しています。

横浜漢点字羽化の会規約

第1章 総則

第1条 名称

本会は、横浜漢点字羽化の会という。

第2条 場所

本会は、以下の所に本部を置く。

〒231-0851 横浜市中区山元町2丁目105番地

第3条 目的

本会の目的は、以下の二つである。

- (1) 本会は、漢字体系の触読文字である『漢点字』で表わされた点字の資料を製作して、『漢点字』を必要とする者にそれを提供する。
- (2) 本会は、任意のボランティア団体として、(1)の活動を通して、日本語の標準的な表記法である『漢字仮名交じり文』を、視覚障害者の文字である点字に実現されるべきことを一般の認識に求め、『漢点字』の普及に努める。

第4条 活動

- (1) 本会の活動は、以下の3つを柱として行なわれる。
 - 1 漢点字の資料に関する要望を募り、それを製作する。
 - 1 古典・辞書等、基本的に不可欠な文献資料を選択し製作する。
 - 3 学習教材として必要なものを選択し製作する。
- (2) 本会は、主に横浜市社会福祉協議会ボランティアセンターを活動場所として利用する。

第2章 会則

第5条 会員

- (1) 本会は、横浜ならびにその近在に居住する者で、漢点字訳をボランティア活動として希望する者、および本会の活動を支援する者によって構成される。
本会の会員は、以下の2つからなる。
 - 1 一般ボランティア会員
ボランティア活動として、漢点字書を製作し、必要な者に提供する。その方法は、主としてパソコンによる漢点字訳である。
 - 2 賛助会員
本会の活動、ならびにその理念に賛同し、財政的援助を通して本会を支援する。
1と2を兼ねることはできる。

(2) 入会および退会は、希望するものが随時入会、退会できる。

第6条 運営

会の運営は、代表ならびに若干名の幹事、会計によって行なわれる。代表ならびに幹事、会計は総会において会員の互選により選出され、任期は1年とする。ただし、再任はできる。代表、幹事、および会計によって、幹事会を構成する。

第7条 総会

その年度の初めに、総会を行なう。
総会は、出席会員によって成立する。
総会は前年度の活動報告、決算報告と当年度の活動計画及び予算計画の審議、決定を行なう。

第8条 例会

毎月1回、原則として15日に、全体の例会を行なう。
例会は、活動等に関して話し合い、研究し、報告される場である。

第9条 会計

(1) 会計の運営は以下の3つからなる。

- 1 一般ボランティア会員による会費
- 2 賛助会員による会費
- 3 助成金

会計年度は、4月1日から翌年3月31日とする。

第10条 会費

(1) 会費の種類

会費は、通常会費と臨時会費に分けられる。通常会費は、以下の納入規定により定められる。
臨時会費は、幹事会の承認を経て徴収される。

(2) 会費の納入

- 1 一般ボランティア会員は、通常会費を月額300円とし、毎年4月、10月に6ヵ月前納する。
- 2 賛助会員は、1口1000円とし1口以上とする。
ただし、一般ボランティア会員で途中入会の場合は、当該半期の残り月数に月額を乗じたものを前納する。

(3) 既納会費は、前払いを含め返還しない。

第11条 規約の改正

規約は会員にはかり改正することができる。

附則

1996年6月15日制定

1997年7月15日改定

天空へ飛び立ちました



漢文のページ

絶句

〔盛唐〕

杜甫

江碧鳥逾白

山青花欲然

今春看又過

何日是歸年

江碧にして鳥逾く白く
山青くして花然えん欲すと
今春看く又過ぐ
何れの日か是れ帰年ならん

絶句 特に題を定めない詩。
江 揚子江上流の成都（四川省）付近の川とされる。

逾 しいよ。ますます。「カ」は、くり返して読むことを示す記号。

欲然 「欲」は助動詞的用法で「今にも…せんばかり」。「然」は「燃」の本字。燃え立つばかりに赤い。

看 みるみるうちに。

何日 いつになつたら…か。「何」は疑問。
帰年 故郷に帰る年。

江南春

〔晚唐〕

杜牧

千里鶯啼緑映紅

水村山郭酒旗風

南朝四百八十寺

多少樓臺煙雨中

千里鶯啼いて、緑紅に映ず

水村山郭酒旗の風

南朝四百八十寺

多少の樓台煙雨の中

江南 揚子江下流の南岸地域（今の南京一帯）。

紅 桃やすもなどの花のあかい色。

水村山郭 水べの村や山ぞいの町。

酒旗 酒屋の旗じるし。

南朝 五、六世紀、中国南部を統治した四王朝を指す。仏教が盛んだった。

多少 ここでは、「多くの」の意。

樓台 高い建造物。寺院の堂や塔。

煙雨 煙のように降る雨。春の雨。
* 杜牧は晩唐第一の詩人とされ、杜甫を「大杜」と称するのに対し、「小杜」と呼ばれた。

絶句

江 碧 ニシテ鳥 逾 白 ク

山 青 クシテ 花 欲 ス 然 エント

今 春 看 又 過 グ

何 レノ 日 カ 是 レ 歸 年 ナラン

何 レノ 日 カ 是 レ 歸 年 ナラン

江南ノ春

千 里 鶯 啼 イテ 緑 映 ズ 紅

水 村 山 郭 酒 旗 ノ 風

二

南 朝 四 百 八 十 寺

多 少 ノ 樓 臺 煙 雨 ノ 中

多 少 ノ 樓 臺 煙 雨 ノ 中

多 少 ノ 樓 臺 煙 雨 ノ 中

多 少 ノ 樓 臺 煙 雨 ノ 中



※ 「絶句」の逾と看の後のおどり字は「ㄩ」と同じで「ㄩ」になります。（墨字印刷では「ㄩ」のHGS祥南行書体を使用。）

※ 「青」「緑」の旧字「青」「綠」はJIS第1・第2水準外の漢字です。点字では、「青」「緑」に変えました。

（参照図書）遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）

この報告とご案内

本誌・機関誌『うか』は、創刊から八年目に入りました。本会の活動をご支援下さっておられる皆様・本誌をご愛読下さっておられる皆様には、深く御礼申し上げますとともに、引き続きのご支援・ご愛読を、お願い申し上げます。

今号から、現在特定非営利法人を申請中の、定款に「視覚障害者の識字と漢点字の普及」を謳っております、「トータルビューマンネット㈱（トエズ㈱）」の機関誌『うずれば』と合体した形で発行することになりました。

トエズ㈱は、現在、この十月を目標に、知的障害者のグループホーム設立に邁進しております。

両誌ともに、ご愛読いただけますことを、切に願って止みません。

日本漢点字協会を訪問しました。

去る二月十五日（日）に、漢点字の創案者である故・川上泰一先生が設立された、日本漢点字協会をお訪ねしました。

現会長の川上リツエ様（川上先生の奥様）と同協会の加藤俊和理事、そして漢点字訳のボランティアの方とお会いしました。

お訪ねしたのは、本会の木下と岡田、漢点

字使用者で東京在住の田中秀臣さんと木村多恵子さん、そしてガイドヘルパーの方お二人です。

お元気な奥様にお目にかかれたことは、望外の喜びでした。

お話は多岐に渡りましたが、漢点字の普及・発展を図るには、漢点字の使用者と、漢点字訳書の製作を担って下さっているボランティアの皆様が、より一層力を合わせる必要があるということと、一致を見たように思います。

川上先生がお元気なころ、漢点字の資料をお作りになっておられたお部屋（現在もボランティアの皆様がご使用になっておられます）を拝見したときは、胸に熱いものを感じました。

最後に、漢点字変換プログラム・E-BOOKSの実践をご紹介して、本会の活動の一端をご覧い



ただきました。

漢点字協会と私達会員が、より密接に関係付けられるよう、努力する必要を、痛感して帰って参りました。

漢点字講習会

昨年度は、初めて横浜市のご後援をいただいで、漢点字の講習会を行いました。

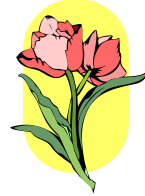
受講者の皆様は、大変熱心に取り組んでおられます。

今年度も同様に開催する予定です。

視覚障害者にも、漢字の知識が、ますます求められて来ています。受講をご希望の方を、ご紹介下さい。

記

主催…横浜漢点字羽化の会
後援…横浜市福祉局障害福祉課
日時…(初回)二〇〇四年五月二三日(日)、



一四：〇〇～一六：〇〇。
会場…横浜市社会福祉協議会・ボランティアセンター八階、ボランティア・コーナー。

申し込み・締め切り…五月一六日(日)までに

電話〇三・三六一三・三一六〇

漢点字ボランティア・ワークショップ

「トータルヒューマンネット」主催、本会共催で計画しております、「漢点字ボランティア・ワークショップ」開催の草案がまとまりました。ここにご案内申し上げます。

これには、日本漢点字協会様からもご協賛いただくことになりました。大変心強い見方を得たと思います。

ご参加下さる漢点字ボランティアの皆様には、INZINERが、交通費の半額を負担させていただきます。

多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

記

名称…漢点字ボランティア・ワークショップ
主催…トータルヒューマンネット
共催…横浜漢点字羽化の会
協賛…日本漢点字協会

日時… 二〇〇四年十月六日（水）

七日（木）

会場… ウィリング横浜（京急・市営地下鉄・上大岡駅〇分、宿泊・可）

今年は、川上先生ご逝去から十年に当たります。協会の会長である奥様をご招待して、先生の思い出、漢点字誕生にまつわる秘話など、お話を伺いできましたらと思っております。

その他、各地域の活動の様子をお伺いしたり、漢点字の将来についてのディスカッションができればと考えております。

夜には、交流パーティーを予定しています。普段お話しする機会の少ない各地域の皆様には、大いに友好を深めていただきたいと思っております。

また、このワークショップの成果を紀要にまとめて、各関係方面に配布して、漢点字への理解を働きかけたいと考えております。

お問い合わせ・お申し込みは、

電話… 〇三・三六一三・三一六〇

FAX… 〇四五・八〇三・九四六四

『唐詩選 下』を、横浜市中央

図書館に、納入しました。

昨年引き続き、吉川幸次郎こうじろう・小川環樹たまき編集、

株式会社筑摩書房発行、『唐詩選 下』の漢点字版が完成し、横浜市立中央図書館に、平成十五年度分として、納入しました。

市内にお住まいの方は同館に申し込んでご利用下さい。他地域にお住まいの方は、最寄りの図書館を通してご利用下さい。

平成十五年度の賛助会員のご芳名

以下の皆様から、賛助会費のご納入をいただきました。心より御礼申し上げます。（順不同）

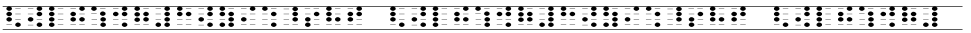
中村裕一様	大滝正夫様	河村幸男様
安田章様	田崎吾郎様	関口常正様
武田幸太郎様	松村敏弘様	飯田みさ様
佐川隆正様		

E-MAIL: eib_okada@yhb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL:

<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>





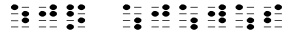
らる 花 の かず 限りなし ことごとく



光をひきて 谷にゆくかも

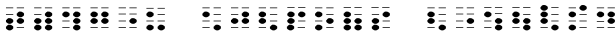


上田 ^み三 ^よ四 ^じ二



桜は日本列島を北上しながら、日本人に春の喜びを伝えてくれます。桜の前後の、どこか待ち遠しい浮きたつ思いは人だけのものなのでしょうが、美しい一日のなかで数限りない花びらを散らす時、花の思いはいかばかりでしょう。どこか深い山奥にひっそり咲いた桜でしょうか。谷に吸いこまれるように散ってゆくのでしょうか。花びらのいちまいいちまいに春の光をひいて。作者の至福の時間をこの一首は読者に分けてくれるようです。美しい春の名歌です。

ともすれば かるきねたみの きざし来る



日がなかなしくものなど 縫わむ



岡本 かの子



「春愁」という言葉があります。ものみな明るく動き出す季節の中であるからこそ、心弱くなる事もあるのでしょうか。作者は画家、岡本太郎の母であり、自由に生き生きと小説や歌を書き、個性的な一生を送った女性でした。そのような女性にもこの一首のような思いをする日があった事は、とても人間らしくて素敵だと思うのです。ともすればとは、どうかするとというような意味です。大きく重い嫉妬ではないけれど、でもちょっとなんだかわたか妬ましい、そんな自分自身に気付いている一首です。日がなとは一日中ということでしょう。

ものなど縫わむという下句に女性らしい心の姿がよく出ています。

編集後記

表紙絵 岡 稲子

右開きから「羽化」・左開きより「うずれば」、新生機関誌の始まりです。表紙が二つ?、編集後記が二つもある?...。まか不思議な紙面となりましたが、ネットワークが広がり、より多くの情報発信が出来ればと思います。

次回の発行は6月15日です。 宇田川 幸子

※本誌 (活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。